

TSMCの熊本県進出に伴い、熊本大学はますます産学官の連携を重視していきたいと考えています。
今回は、木村敬知事との対談を通して、熊本の持続的発展のための、連携の取り組み、大学への期待、今後の展望について意見交換を行いました。

熊本大学学長
小川 久雄

熊本県知事
木村 敬氏

産学官の連携で描く、持続可能な未来 ～熊本から世界へ～

熊本県防災センター屋上にて

**国際化効果から
日本一の産学官連携の拠点に**
―半導体製造世界最大手である台湾のTSMC進出の波及効果と、今、大学に期待することは？―

木村 九州フィナンシャルグループの試算では、熊本県内に及ぶTSMC進出の経済効果は2022年から10年間で1兆2000億円と言われています。実際この約3年間で、半導体関連企業の立地協定締結件数は62件。その他の業種の誘致件数も含めると、昨年は72件で過去最高となっています。波及効果としては、企業の進出に伴って雇用が増え消費が伸び物流が盛んになる等の経済効果。次に、県内の大学を卒業した方の県内就職先の選択肢が増え、県内就職率が向上する。加えて一番大きな効果は、外資系企業が県内に入ってくることによって、経済のみならず、物的、人的いような交流が広がって、熊本が世界に開かれることだと思っています。

熊本と台湾を結ぶ直行便は2023年8月までゼロ便だったのが、今は週15便。韓国や香港を加えた国際便は週43便と、地方空港では日本一になりました。これはTSMCの進出をきっかけに熊本が世界に開かれたことが大きな理由です。インバウンドの観光客も、昨年は年間で約144万人と過去最多でした。

そうした中で熊本大学に期待することはとても大きい。台湾の半導体が世界を席巻したのは、産学官の連携が進んでいて、企業の研究開発を大学と一緒にやってやっていること。それを

り、取り組みが加速しました。また、新しい組織を作らなければならないと思います、まずは2022年に「半導体研究教育センター」を設置しました。翌年にはそれを「半導体・デジタル研究教育機構」にしました。そして2024年、大学発足以来初めての学部相当組織となる「情報融合学環」を立ち上げ、工学部には「半導体デバイス工学課程」を設置しました。この課程は、国内の大学で初となる半導体技術者・研究者の育成に特化した学士課程です。研究や人材育成が一番大事ですが、そのためには資金と指導者が必要。文部科学省や内閣府の予算がついたおかげで、優秀な指導者を良い条件で迎えることができました。それが今の発展につながっています。

木村 当時、小川学長が蒲島前知事と私のところに東大との連携について相談にいらつやって、そういえば蒲島さん、東大の名誉教授ですよ。東大の総長を知っているでしょ。そう言われるとプライドをくすぐられて「うん、何でも言ってくれ」なんて、見栄を張っちゃって。それで当時の総長のところに、私と蒲島前知事で直談判に行っただけです。その時に総長が紹介して下さったのが、当時工学部の教授だった黒田忠広さんという半導体研究の中心となる方と、工学部の加藤泰浩学部長。そして熊本大学にぜひ人を出しましょうと言ってくださった。それがスタートですね。東大工学系研究科ナノシステム集積センターの分室が熊大の中にあるなんて、熊大の方だけでなく熊本県民の私もびっくりです。

小川 日本の大学で初めて熊大に設

政府が応援するという構図で、最先端の半導体がどんどん出てきている。そのように熊本の産業と大学が結びつくことによって、新しい研究開発からビジネス、人々があつと驚くような開発が熊本大学を起点として生まれ、県民の、日本の、世界の人々の暮らしがよくなるきっかけができたらいなと思っています。

今年、熊本大学が文部科学省に採択された「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」では、交通渋滞や地下水保全など熊本県が抱えている地域課題を一緒に解決していくことが含まれており、熊本大学の研究力と幅広い知見が、地域の公共的な課題解決につながることを期待しています。そして熊本が日本一の産学官連携の拠点になればと思います。

半導体研究に注力 オープンイノベーションを

―期待を受けて、大学の取り組みは？―

小川 日本は失われた30年をこれから盛り返していかなければなりません。そんな状況下で2021年秋、熊本にTSMC進出の話がありました。私が学長になったのが同年4月。そのため、半導体を中心に頑張っていこうと決心しました。

そういう時に、文部科学省の「地域活性化人材育成事業」SPARC（）に採択され、本学と熊本県立大学、東海大学で連携して地域創生事業を始動させました。

次に、県が大変力を入れてくださって、内閣府の「地方大学・地域産業創生交付金事業」に採択されたことによ

置していただきました。蒲島前知事と木村知事のおかげです。

木村 あのと小川学長の強い思いがあったからこそと、懐かしい思い出です。

小川 今、工学部がある黒髪南キャンパスでは、2つの新施設を建設中です。一つは半導体やDXを学ぶ学生や研究者が入居し、新たな研究や学びを实践する場になります（Dスクエア）。隣接する施設には、共同研究ラボやクリンルームを設置し、企業や他大学との共同研究の場になります（セミコングラタ・オープンイノベーション・ラボラトリ（SOIL））。東大や東北大も参加予定で、この2つの施設が隣接することで産学連携と人材育成の相乗効果を狙います。

木村 東北大は大きいですね。
小川 日本で今一番ホットな大学の一つです。

木村 半導体研究でトップクラスなのは、東大と東北大。そこと熊大が強く連携するというのはすごく大きい。
小川 なぜその2大学が興味を示す



2025年春に竣工予定の研究・教育施設



熊本県知事 **木村 敬氏**

1999年東京大学法学部卒。総務省に自治事務官として入庁後、熊本県総務部長、内閣府地方創生推進事務局参事官等を経て、2020年熊本県副知事に就任。2024年4月より熊本県知事。趣味は旅行（特に温泉巡り）。座右の銘は、為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。東京都出身。

K I M U R A T A K A S H I

熊本大学の研究力と知見による地域の課題解決に期待

かという点、熊本にはT S M Cがあります。そして周辺産業の存在が大きい。2 O O社以上の産業があります。産学連携は必須なんです。

木村 T S M Cのような台湾の企業は、自社内に研究機関、R & Dセンター等を持っているんですが、本格的なことは大学にヒト・モノ・カネ・ノウハウを出して一緒にやってやる。学生も巻き込んで新たなイノベーションを起こす。企業の研究者だけではできないイノベーションが今の台湾をつくっています。日本は大手企業の中に研究機関を閉じ込めてしまっている、新しい製品が出てこなかった。

地域の発展のために相互協力が必須

小川 県との関係が非常に大事と痛感しています。大学だけでは何もでき

ない。学長になるまで、県との関係がこれほど大事だとは知らなかったが、今はひしひしと感じています。県といかに連携していくかによって大学の発展が決まります。

木村 県にとっても大学は大事です。2 O 2 O 年秋、私が副知事で震が関から出向してきた時、コロナ禍でした。コロナ対策を行うときに、医学部を中心に熊本大学と県がしっかりと連携できたことで、熊本では医療崩壊せず

に済みました。大学の医学部が持つ県全体の医療機関を束ねるネットワークが大変ありがたかった。

相互協力という点においては、私が掲げる「くまもと新時代、共に未来へ」というスローガンをより具体化した「くまもと新時代共創基本方針」を昨年末に策定しました。その中には「世界に広がる「人を育てる」共創」 という3つのキーワードがあります。ポイントはその真ん中の「人を育てる」。今、少子化と人口減少で非常に厳しい状況にある中で、「どうやって人を育てていくか」が、熊本県にとって一番大事。それには当然、熊本大学と相互協力した人材育成。また、熊本大学が県内の他大学や高校と連携することも必要だと思っています。

また、熊大教育学部附属小学校での国際クラスの設置に向けた試み。これ

には私も一番期待しています。

小川 附属小での国際クラスの設置は、台湾の方が子どもを連れて来られることを想定しています。今、熊本県は外国人の増加率が凄いいことになっています。

木村 日本一です。

小川 そんな時にこれまでの教育でいいのか、教育の国際化が大事だろうと。ただ、多くのインターナショナルスクールは文部科学省の学習指導要領には基づいていないのです。

木村 日本の学習指導要領に基づく児童育成を英語で行う国際クラスは、日本で初めてなんですよ。日本の学習指導要領は世界でも大変評価されています。台湾の方々と話すと、日本の中高生は読み・書き・算盤がある程度のレベルまで皆揃っていてとても良い、と言われます。「人を育てる」「世界とつながる」という私の方針にピタッと合致しています。

小川 「共創」については、木村知事が大変気にされている「水の問題」。熊大には「水の問題」をずっと研究している研究者がいます。水の災害に詳しい教員もいます。

木村 ありがたいですね。

小川 彼らはT S M Cと共同研究をしているのですが、熊本地震の前からずっと地下水について調べていました。今始めたのではなく以前からの調査でデータの蓄積があるので、良い研究ができると思いますね。

嬉しいのは、受験生の志願倍率が伸びたこと。情報融合学環は3・9倍。工学部の半導体デバイス工学課程は4倍を超えています。それだけ皆さんが

興味を示してくれている。高校生は敏感ですね。また興味深いことに、教育学部の倍率が上がってきているんですよ。

木村 それはいいことですね。

小川 これには、国際クラスが影響していると思います。今、熊本は非常に良い流れになっていますね。

持続可能な未来に向けて伝統を守りつつ変化する

―木村知事の公約にある「世界に伍する質の高い教育」が、まさしく熊大で実現されていますね。

木村 今、まさしく熊大が時代に合わせて自ら変化していってる姿を、県民や学生たちが理解してくれている。小泉純一郎さんが所信表明演説で仰った言葉なんですが、「この世に生き残る生き物は最も力の強いものか。そうではない。最も頭のいいものか。そうでもない。それは変化に対応できる生き物だ」。これは、ダーウィンの進化論のエッセンスです。もちろん守るべきものはしっかり守りつつ、時代に合わせて変化していくこと。特に学部相当の組織を開学以来初めて、熊大で設置された。時代に合わせて常に変化し続けてくださっている。これが高校生から見えて「熊大ってワクワクドキドキする」と思えてきているんじゃないか。それが一番嬉しいですね。

小川 仰る通りで、熊本大学には第五高等学校以来138年の伝統や、医学部の前身である再春館から269年の歴史があります。もちろん伝統は大切にしますが、同時に時代に合わせ



て変わっても行かなければなりません。それを非常に急速さを意識してやっているつもりです。

木村 学長の思いに共感します。これまでも思いを共有しながら事業を進めてきましたが、これからも熊大と熊本県の二人三脚で進んでいきたいと思っています。

小川 距離が近いというか、コミュニケーションが取れている関係が非常に大事。速く動く体制を今後も整えていきたいと思っています。

“走る学長”、挑戦する熊本大学―走る学長”というイメージですね。

木村 “走る学長”によって挑戦していく熊大の姿に若者たちが注目して

オープンイノベーションの環境を整え、産学官連携による地域貢献と次世代の成長を



熊本大学学長 **小川 久雄**

1978年熊本大学医学部卒。1984年より31年に渡り、当大学に医員、助手、講師、助教授、教授として奉職。2016年国立循環器病研究センター理事長に就任。2021年4月、第14代熊本大学学長に就任。専門分野は循環器内科学。学生時代は野球に夢中。徳島県出身。

O G A W A H I S A O

優秀な学生が集まってくる。さらには台湾の4つの国立重点大学と大学間交流協定を締結し、日本でもトップクラスの大学と連携を図っており、イノベーションが生まれる環境がある。大学は、若者たちが集まる場。そこで地域に新しいことが生まれるのがアカデミア。これからも世界をリードする研究や地域課題に取り組む、県民から見えてキラキラしている熊本大学であってほしい、また、そうなっていくと確信しています。

小川 来年度にはまた、新しい学部、共創学環を設置予定です。ここでは、地域創生、グローバルの両方をテーマにするので、楽しみにしておいてください。

本日は、ありがとうございました。